



大阪・関西万博遠征記



ホテルの玄関を出ると、薄日が差していた。令和7年9月28日朝、我々一行は北浜の街を淀屋橋駅めざして歩いていた。この辺りは江戸時代から大阪の中心街で、銅座跡に大阪最古の愛珠幼稚園があり、道を一本隔てた北側には、緒方洪庵の適塾の遺構がある。大塚博紀最高師範に率いられた一行は、万博で和道流の演武を披露するために大阪を訪れていたのである。

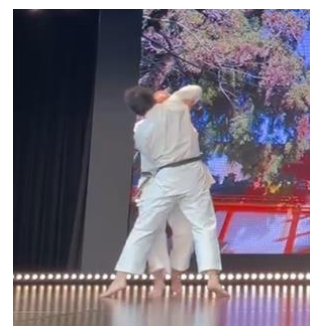
万博会場に着いた時、我々が目にしたのは人、人、人の渦だった。しかし会場に入るについては、関係者入り口から誰何されることもなくスムーズに入場することができた。まず演武会場であるフェスティバル・ステーションの位置を確認する。演武は午後からである。時間があるので大屋根リングに上ってみることにした。上からは独自の意匠を凝らした各国のパビリオンが見える。しかし人気のあるパビリオンに入場することは絶望的であった。なぜならすでに予約で満杯だったからである。

大屋根リングの下のベンチに坐って、人の波を見るときも眺めていると、様々なものが見えてきた。老若男女、同国人、異国人の様々な立居振舞である。後姿を眺めていると、肥瘦厚薄、長躯短躯、腰を振るか振らざるか、歩幅が大きい小さいか等々、それこそ人間の百態が見えてくるのだった。我々武道修行者にとっては、恰好の人体観察である。普段道場で稽古する者にも様々な体格差があるから、そこで得られた感覚をもとに、あの人はこうかな、あの人は違うだろうなどと、技の掛け具合を想像するのも一興であった。

さて、演武である。事前に事務局から、演武場の床に荒れている箇所があるから、足袋の着用を推奨されていた。床を観察してみると、木材のささくれも無いようだし、足袋を履くと滑りやすそうに見えたので、宗家の判断もあり、素足で演武することにした。結果としてこの判断は間違っていなかった。



最初は押田良光範士師範と三田篤五段の基本組手である。一本目、二本目、六本目をいずれも崩しから制圧へと応用変化して、技が決った状態を体現して見せた。



続いて押田範士と大塚博紀最高師範の短刀捕である。一本目は左手一本で小手返を決める難しい技だが、見事に決る。二本目は足刀で、三本目は横薙ぎの攻撃に身を沈めて捌き、顎を突き上げて無抵抗にする。いずれも淀みなく流れるような体捌きで、技が決った。



真剣白刃捕。太刀をもって切りかかる寺田英視範士師範に、悠々たる自然体で捌く最高師範の姿は、正しく独往独来の風格であった。

かくて観客から万雷の拍手を浴び、退場することができた。演武の最中、宮川悦子四段が、世界に向けた実況中継の解説を務めたことも画期的であった。演武が終了して外へ出ると、雨が降り出した。歓喜の雨か、嘆きの雨か、それは天のみぞ知る！

